

朝日新聞

<input type="checkbox"/>	00001	2015年08月31日	朝刊	2 社会	032	01205 文字	あり	<a href="#">夜歩きの子、声かけぬ大人 防犯意識広がり「通報されるかも」</a>
<input type="checkbox"/>	00002	2015年08月31日	朝刊	2 社会	034	01804 文字	あり	<a href="#">(緊急報告 大阪・中1遺棄事件：下) 子の夜歩き、声かけ二の足 【大阪】</a>
<input type="checkbox"/>	00003	2015年07月30日	朝刊	教育 1	031	01709 文字	あり	<a href="#">夜の街、子のSOS聞きに 名古屋のNPO「アウトリーチ」活動</a>
<input type="checkbox"/>	00004	2015年06月16日	朝刊	1 社会	037	01185 文字	あり	<a href="#">夜の街、漂う10代 名駅前、夜回りに同行 「大人が気にかけて事件防いで」【名古屋】</a>
<input type="checkbox"/>	00005	2015年06月11日	朝刊	1 社会	031	01386 文字	あり	<a href="#">LINEで交友接点「学校が把握 難しい」 【名古屋】</a>
<input type="checkbox"/>	00006	2015年06月10日	朝刊	名古屋・1 地方	025	00441 文字		<a href="#">生徒指導、地域・民間と連携を 名古屋で教員協議 / 愛知県</a>
<input type="checkbox"/>	00007	2015年03月14日	朝刊	2 社会	038	02280 文字		<a href="#">校外の実態、把握困難 「被害の恐れ」小中高400人 川崎事件受け、国調査【西部】</a>
<input type="checkbox"/>	00008	2015年03月14日	朝刊	1 社会	039	02170 文字		<a href="#">校外の見守り難題 川崎の事件受け「子どもの安全」調査</a>
<input type="checkbox"/>	00009	2014年08月27日	夕刊	1 社会	007	01706 文字	あり	<a href="#">非行NO、若者夜回り 着ぐるみ姿で声かけ 名古屋のNPO、同世代目線 【名古屋】</a>

読売新聞

No.	▼ 掲載日	見出し	発行形態	面名	字数	段
1	2014.04.17	<a href="#">「悩み相談できる場を」 女子高生ら市長と意見交換＝愛知</a>	中部朝刊	名市内	451	02
2	2014.03.16	<a href="#">「羽ばたく」子どもの非行防止活動に取り組む 沼田悠希さん20＝愛知</a>	中部朝刊	名市内	1588	04
3	2013.12.24	<a href="#">虐待防止 サンタが訴え ハーレーに乗り繁華街パレード＝愛知</a>	中部朝刊	名市内	425	02

## 中日新聞

- 中日 20160403 朝刊三河総合 [10代の居場所つくり 刈谷の高校生ら 花見や声掛け企画](#)
- 中日 20160127 朝刊市民版 [「居場所づくりが必要」 熱田 JKビジネス対策勉強会](#)
- 中日 20160121 朝刊県内総合 [学習会「JKビジネスと関係性の貧困」](#)
- 中日 20160116 朝刊市民版 [子の貧困 連鎖防止へ討論会 来月、半田 名古屋のNPO理事長ら](#)
- 東京 20150825 朝刊特報 2面 [こちら特報部 大阪・中1遺棄事件の背景\(下\) 親の養育力向上 解決のカギ 貧困などが家出原因に 児相](#)
- 中日 20150825 朝刊特報 [特報 孤立する子ども 居場所は？ 家も学校も居づらい 一時保護受け入れ限界 家出背景に貧困の影](#)
- 中日 20150824 朝刊社会 [名古屋・声掛け活動ルポ 繁華街さまよう無防備 少女ら「大阪遺棄、運悪いだけ」](#)
- 中日 20150821 朝刊社会 [中1女子殺害1週間 深まる謎 顔見知り？ 犯行誇示？ 凌斗君は？](#)
- 中日 20150610 朝刊県内版 [刈谷事件 特別でない NPO代表 高校教諭らに講演](#)
- 中日 20150527 朝刊市民総合 [居場所なくした子のよりどころに 支援者養成へ講座 中川のNPO](#)
- 中日 20150527 朝刊なごや東  
総合 [居場所なくした子のよりどころに 支援者養成へ講座 中川のNPO](#)
- 中日 20150319 朝刊市民版 [着ぐるみ姿で活動の荒井さん 非行少年支援を語る](#)
- 中日 20150301 朝刊朝文面左 [ニュースを問う 蜘蛛美鶴 \(社会部\) JKビジネスの少女たち 心に屈折、居場所求める](#)
- 中日 20141107 朝刊社会 [客と行き先自由 裏オプで稼ぐ 無防備JK バイト感覚 本当は怖い でも、慣れちゃった](#)
- 中日 20140705 朝刊社会 [橋の下暮らし15の夜 家出、万引の3年...18歳「働き人生やり直す」](#)
- ほか中日新聞新聞掲載
- 中日 20140502 朝刊尾張版 笑顔！
- 中日 20140502 朝刊市民総合 笑顔！
- 中日 20140502 朝刊近郊総合 笑顔！
- 中日 20140417 朝刊市民版 着ぐるみ姿で非行防止 名古屋のNPO法人 声掛け運動

## 毎日新聞

- JKビジネス：規制1カ月 親の虐待逃れ／「家帰るよりマシ」 少女ら「居場所」求め  
2015.08.01 中部朝刊 24頁 社会面 写図有 (全1,090字)
- くらしナビ・ライフスタイル：子ども虐待防止、若者が声 9月の世界会議でフォーラム  
2014.06.25 東京朝刊 17頁 家庭面 写図有 (全2,254字)
- 河村・名古屋市長：「立派な人になって」 非行防止活動を視察 /愛知  
2014.04.17 地方版/愛知 21頁 写図有 (全598字)

非行防止：着ぐるみで 名古屋のNPO若者ら、かつての自分重ね訴え 繁華街でたむろ、未成年者に  
2014.04.15 中部夕刊 6頁 社会面 写図有 (全1,072字)

・最近のメディア掲載（新聞）記事内容の一例

## 日本経済新聞

### 第5部 居場所を探して(1) 孤独な夜、さまよう少女——家庭との結びつき希薄(学びの現場から)

2015/12/04 日本経済新聞 朝刊 43 ページ 1460 文字

今年8月、東京・渋谷の繁華街を女子高生(17)が弱々しい足取りで歩いていた。直前まで男に監禁され、暴力を振るわれたという。隙を見て逃げ出したところを街頭で若者への声かけ活動をしているNPO法人「BONDプロジェクト」(東京・渋谷)の橘ジュン代表(44)に保護された。

「家よりマシ」

両親の離婚後、祖父母に引き取られてから夜遊びが常態化。祖母の「出ていけ」のひと言で高速バスに飛び乗り上京した——。新潟県出身の少女はぼつりぼつりと境遇を語った。家出から2日後、新宿・歌舞伎町でその男に「俺に付いてくれば楽に暮らせる」と誘われた。「怖かったけど、家よりマシかな」。たどり着いたビルの一室で男の態度は一変した。

寄る辺のない子供の警戒感の薄さは、深刻な事態と隣り合わせだ。

警察庁によると、2014年に深夜徘徊(はいかい)で補導された少年少女は約43万人。少子化や防犯活動の効果で減る傾向にあるが、SNS(交流サイト)で外部と連絡を取り、夜間でも出歩く子供は珍しくない。

少女が渋谷で保護された同じ月、大阪府寝屋川市では、商店街などで夜を明かした中学1年の少年少女が事件に巻き込まれ遺体で見つかった。

警察庁は「まずは家庭で対策を」と求めるが、子供を守り、育てるべき家庭を取り巻く環境は大きく変化している。

白梅学園大の汐見稔幸学長(教育学)は「家庭で保護者と子供が関わる時間は減っている」と指摘する。政府の調査では、共働き世帯は13年までの10年間で約100万世帯増加。ひとり親世帯も増えており11年度で約146万世帯に上る。生計を維持するため子供の生活習慣や教育に気を配る余裕のない家庭も多い。

官民で支える

愛知県の高校3年の少女(18)も幼い頃に両親が離婚。親に「大切にされた記憶はない」。学校でのいじめで自殺を考えたこともある。

今春、名古屋駅前を深夜、目的なく歩いていた時に声をかけたのが、NPO法人「全国こども福祉センター」(名古屋市)の荒井和樹理事長(33)だった。話すうちに打ち解け、センターで同世代の仲間もできた。父との生活は今も落ち着かないが、ほぼ毎週、仲間と声かけ活動に参加。「自分のような子供を助けてい」と大学に進み、社会福祉士になるのが夢だ。

荒井理事長は「家庭に居場所のない子供のSOSを受け止める場所や関係を身近につくる必要がある」と強調する。

学びの場でもそんな子供たちに手を差し伸べる取り組みがある。

「テストが近いんだ」「それなら英語をやろうか」。NPO法人「さいたまユースサポートネット」(さ

いたま市) は市の委託を受け、無料学習教室を開く。大学生らのボランティアに教わる中高生の中には、複雑な家庭事情の子供もいる。

青砥恭代表(66)は「親との関係が希薄な子供は読書や文化体験が減り、学ぶ意欲も生まれにくい。結果として将来の格差につながる」と、支援の必要性を説く。

行政も事態を重く見る。ひとり親世帯が多い沖縄県は11月、子供の深夜徘徊防止のため児童館などを「夜の居場所」とする有識者の提言をまとめた。国は子供に学習支援や食事を提供する「居場所」を19年度までに年間のべ50万人分整備する計画を打ち出した。

ただいずれも対応できる範囲は限られる。街角にさまよう子供たちをどう救うのか。関係者の模索は続く。

家庭や学校、地域で子供が安心できる居場所が減っている。問題に取り組む現場の動きを追う。

## 中日新聞

2016年04月03日 中日新聞 朝刊 朝刊三河総合 27頁

### 10代の居場所つくり 刈谷の高校生ら 花見や声掛け企画

少年少女が巻き込まれる事件が多発している中、刈谷市の高校生らが、十代の居場所づくりのため活動を始めた。「自分は必要にされているんだという場所をつくりたい」と花見や駅前での声掛け活動などを企画している。

取り組むのは、大学一年の大口千智さん(18)＝今川町＝と、保育士の竹内主恵子(すえこ)さん(24)＝小垣江町。刈谷市を拠点に活動する若者らの団体「三河SSC」のメンバーだ。

二人は、着ぐるみ姿で名古屋市の繁華街に出て未成年に声掛けするNPO法人「全国こども福祉センター」の活動に参加。三河地方から、居場所を求めて名古屋まで出て、非行に走る十代も多いことを知った。

大口さんには、若者たちが家庭や学校で周りとの関係性が持てず「心細さ」を胸に抱えているように見えた。そこで、SSC自体やその活動を、地元での彼らの居場所にして、若者と社会をつなごうと乗り出した。

三月二十二日には、同センターの荒井和樹理事長をゲストに招いた若者たちの交流会を刈谷市産業振興センターで開催。参加した三河地方の高校生や大学生など十人と、これからのSSCの活動について話し合った。

「同世代だからこそ打ち解けて話せることもある」と大口さん。今後は刈谷駅前での声掛けや、ツイッターでの情報発信を通してSSCの活動への参加を呼び掛ける。竹内さんは「居場所がない子たちが『受け入れられてる』と感じられる場所にしていきたい」と話している。

参加の申し込みや問い合わせは三河SSCのメールアドレス＝mikawassc.1@gmail.com＝へ。(土屋晴康)

2016年01月27日 中日新聞 朝刊 朝刊市民版 16頁

### 「居場所づくりが必要」 熱田 JKビジネス対策勉強会

女子高生らに接客させる「JKビジネス」の問題を学ぶ学習会が二十四日、熱田区の県司法書士会館で開かれた。

「反貧困ネットワークあいち」（中村区）が企画し、約五十人が参加した。

繁華街をぶらつく子どもたちに、着ぐるみを着て声かけ活動をしているNPO法人「全国こども福祉センター」（中川区）理事長の荒井和樹さん（33）が講演。「勉強や部活など『学校の評価軸』から外れた子どもたちにとって、お金を稼げ、『自分が認められる場』としてJKビジネスが受け皿になっている」と指摘した。

さらに、子どもたちが仲間と出会ったり、自分の役割を見つけられたりできる居場所づくりの必要性を訴えた。

トークセッションで登壇した市立高校の男性教員は「学校を遅くまで開放するなど、子どもたちが勉強以外に楽しめる場を保障していかなければいけない」と話した。（山本真嗣）

2016年01月21日 中日新聞 朝刊 朝刊県内総合 21頁

### 学習会「JKビジネスと関係性の貧困」

24日後1～4、名古屋市熱田区新尾頭1の県司法書士会館。反貧困ネットワークあいち主催。JK（女子高校生）を対象にしたビジネスの実態や背景、支援のあり方を考える。NPO法人「全国こども福祉センター」（同市）の荒井和樹理事長らが講演。資料代300円。（問）ふたご司法書士事務所＝0586（52）5266

2016年01月16日 中日新聞 朝刊 朝刊市民版 22頁

### 子の貧困 連鎖防止へ討論会 来月、半田 名古屋のNPO理事長ら

半田市は子どもの貧困問題をテーマにした討論会「みんなでつくろうこどもの未来」を二月六日午後一時半から、半田市東洋町のアイプラザ半田で開く。定員六百人。入場無料。

名古屋市のNPO法人「全国こども福祉センター」の荒井和樹理事長が「貧困の連鎖を防ぐために、知っておきたいこと」と題して講演する。日本福祉大社会福祉学部の野尻紀恵准教授の司会で荒井さんや半田市主任児童委員らが議論するパネルディスカッションもある。

討論会に先立ち、午前九時半から、市民らによる「円卓会議」があり、貧困の連鎖を防ぐための方策などを話し合う。会議の内容はパネルディスカッションで紹介される。

市子育て支援課の柘植偉昭さん（50）は「参加することで自分ができることに気付き、力を貸してほしい」と期待する。（問）市子育て支援課＝0569（84）0657（大久保謙司）

2015年08月25日 東京新聞 朝刊 朝刊特報2面 27頁

## こちら特報部 大阪・中1遺棄事件の背景（下） 親の養育力向上 解決のカギ 貧困などが家出原因に

児相・学校など行政の対応に限界

今回のような事件が起きると、「行政は何をしていた」という声が出る。

その行政も一応、子どもの居場所づくりに目を向けてきた。例えば、国と地方自治体の連携事業の「放課後子供教室」がある。放課後の居場所になるように学校や児童館、公民館で年齢を問わず、体験学習などに参加できる機会を提供している。自治体レベルでは、公設民営のフリースペースを用意する場合もある。

ただ、子どもに無償で遊び場を提供する「子どもの家」事業に取り組んできた大阪市は、昨年度に事業を廃止し、学童保育に一本化した。橋下徹市長は「保護者負担に違いがあるのは、補助金制度として問題」との理由で、有料の学童保育の方を残した。

本年度から始まった国の子ども・子育て支援の新制度では、学童保育の対象を原則、小学一～三年から六年まで広げ、学童保育などへの補助金も増やした。だが十代後半でも、障害があっても垣根なく引き受ける「こどもの里」への補助は以前の額には届かない。

荘保さんは「学童保育は親が働くために子どもを預ける場所が必要という発想だ。お金を払って預かってもらう。お金を出せない子は行けない」と憤る。

一方、大阪教育大の藤田大輔教授（学校安全論）は「行政主導で『場』を用意しても、利用するのは小学生以下というのが実態。中学生以上はほとんど使っていない」と指摘する。

さらにNPO法人「全国こども福祉センター」の荒井和樹理事長は「児童相談所が介入するには、何らかの理由が必要になる。学校の先生は学外のことまでやる余裕がない」と話す。

森本弁護士は「行政には限界がある。相談機関を増やしても、相談しなきゃいけないことだと、子ども自身が思っていない。顔見知りのスタッフが、何げなく耳にして『それたいへんなっちゃうん』と支援につなげている」と言う。

一般的に子どもが深夜、街をさまよう背景には貧困問題が横たわっていると有識者らは口をそろえる。

NPO法人「しんぐるまざあず・ふぉーらむ」の赤石千衣子理事長によると、経済的に苦しい母子家庭は手狭な家に住みがちだという。「母親と折り合いが悪くなっても、顔をつきあわせないといけない。母親が連れてきた交際相手と距離を取りたくとも、居場所がない。そうして家を出ることを選択してしまう」

千葉明德短大の山野良一教授（児童福祉）は「経済的な困窮が親子の時間を奪い、寂しさを募らせた子どもが深夜徘徊（はいかい）や家出に走ってしまう」と説明する。

「母子や父子家庭では、家計のために親は徹底して働くことを強いられる。特に母子家庭の場合、非正規労働が圧倒的。複数の仕事を抱えたり、実入りのよい早朝や深夜、土日の仕事に就いたりしている。代償になるのが親子の時間だ」

両親がいる家庭でも、父親が失業中の場合は注意が必要という。「一般論になるが、男性にとって仕事はプライドにかかわる。さらに人のつながりの中心。それを失った状態だと、孤立感から虐待につながりやすく、子どもが家を飛び出す端緒になりかねない」

有効な手だてを考えるのは難しいが、山野教授は「親のしつけ論に終始してはいけない。問題はもっと根深いのだから」と説く。

「現実として家出してしまう子はいる。財源を考えると悩ましいが、逃げ込める場所は十分つくっておかないといけない。そうした場所を子どもたちにどう知ってもらうかも課題だ。ただ、親の養育力を上げない限り、根本的な解決にならない。働きながら子どもと向き合える時間を確保できるよう、児童扶養手当などを拡充させるべきだ」

#### デスクメモ

現政権は外国の脅威をあおって、戦争法案を振り回す。だが、本当の脅威は貧困と格差で崩れつつある社会の内側にあるのではないか。野宿する子どもたちの存在は象徴的だ。そうした現実を無視し、一方で少子化対策と称して「産めよ、殖やせよ」と連呼する。自戒を込めて、社会の深層に目を凝らしたい。(牧)

2015年08月25日 中日新聞 朝刊 朝刊特報 21頁

特報 孤立する子ども 居場所は？ 家も学校も居づらい

一時保護受け入れ限界 家出背景に貧困の影

大阪府の中学一年女子生徒が殺害・遺棄され、ともに行動していた男子生徒も遺体で見つかった事件。事件に巻き込まれる前から、女子生徒は野宿用に「簡易テント」を持っていたという。なにが十三歳の少女を野宿へと向かわせたのか。まだ明らかになっていない。ただ、この社会には、家にも学校にも居場所がない子どもたちがあちこちにいる。事件をきっかけに子どもたちの居場所について考えた。(榊原崇仁、中山洋子)

今回の事件では、大阪府寝屋川市の中学一年、平田奈津美さん（13）と星野凌斗（りょうと）君（12）が犠牲になった。深夜、泊まる場所がなかったとみられる二人。だが、似た光景は珍しくない。

「帰りたくない」

今年二月、大阪市西成区の児童福祉施設「こどもの里」に高校生くらいの少女が駆け込んだ。午後十時すぎ。母親とうまくいかず、家を飛び出した。この施設を教えてくれる人がいて、やってきたという。

第三の場所必要

館長の荘保共子（しょうほともこ）さん（68）は「本当は身近な地域に、いつでもどんな子どもでも駆け込める場所があればいいんですが」と嘆息する。

荘保さんは日雇い労働者たちの簡易宿泊所が並ぶ一角で約四十年間、子どもたちを見守ってきた。開館時間は午後七時までとしているが、深夜まで開けている。貧困や虐待などで、学校から遠ざかった地域の子どもたちの逃げ場になっているからだ。年間に四～五人ほど「飛び込み」の子どもたちがいるという。

地域の児童相談所に通報し、親子間の仲立ちを頼む場合も少なくない。「家に居場所がなく、学校にも行きづらい子どもたちのために第三の場所は必要。それを地域につくらなくては」

厚生労働省によると、二〇一三年度に児童相談所などが一時保護した件数は、全国で約三万三千三百件に上る。十年前と比べて、一万件は増えている。

〇四年に設立された全国初の子ども向けシェルター「カリヨン子どもの家」（東京）の石井花梨（かりん）事務局長（32）は「都市部では十年以上前から、一時保護施設はいっぱいいっぱい。都内では布団を敷くスペースもなく、廊下や押し入れで寝ているほど」と話す。

同シェルターは、行政の支援から漏れやすい十五歳以上を対象に年間に三十人前後を受け入れている。

深夜に出歩き、警察に補導される子どもの件数は減少傾向にある。だが石井さんは「昔は外で同年代の子たちとたまっていて、警察も見つけやすかった。最近は一人か二人で夜を過ごしている。かつての非行少年のコミュニティーもなくなっている」とみる。

### 危うい寝泊まり

その分、家出少女に寝泊まり場所を提示する「神待ち掲示板」など、スマホを通じて見ず知らずの大人とつながりやすく、危険が近づいているという。

大阪市では来春にも、弁護士や児童福祉施設の関係者らが居場所のない子どもたちを受け入れるシェルの開設を進めている。

その運営母体であるNPO法人「子どもセンターぬっく」を近く設立する森本志磨子弁護士（43）は、これまで少年事件などを通じ、行き場のない子どもたちを見続けてきた。

「とりわけ、貧しい家庭は地域との関係が希薄で、親戚付き合いもない。子どもにも相談相手がいない。焼け石に水でも、最後の受け皿は必要だ」

### 有料化で枠狭く

今回のような事件が起きると、「行政は何をしていた」という声が出る。

その行政も、子どもの居場所づくりに目を向けてきた。例えば、国と地方自治体の連携事業の「放課後子供教室」がある。放課後の居場所になるように学校や児童館、公民館で年齢を問わず、体験学習などに



参加できる機会を提供している。自治体レベルでは、公設民営のフリースペースを用意する場合もある。

ただ、子どもに無償で遊び場を提供する「子どもの家」事業に取り組んできた大阪市は、昨年度に事業を廃止し、学童保育に一本化した。橋下徹市長は「保護者負担に違いがあるのは、補助金制度として問題」との理由で、有料の学童保育の方を残した。

本年度から始まった国の子ども・子育て支援の新制度では、学童保育の対象を原則、小学一～三年から六年まで広げ、学童保育などへの補助金も増やした。だが十代後半でも、障害があっても垣根なく引き受ける「こどもの里」への補助は以前の額には届かない。

荘保さんは「学童保育は親が働くために子どもを預ける場所が必要という発想だ。お金を払って預かってもらう。お金を出せない子は行けない」と憤る。

## 中学以上視野に

一方、大阪教育大の藤田大輔教授（学校安全論）は「行政主導で『場』を用意しても、利用するのは小学生以下というのが実態。中学生以上はほとんど使っていない」と指摘する。

さらにNPO法人「全国こども福祉センター」の荒井和樹理事長は「児童相談所が介入するには、何らかの理由が必要になる。学校の先生は学外のことまでやる余裕がない」と話す。

森本弁護士は「行政には限界がある。相談機関を増やしても、相談しなきゃいけないことだと、子ども自身が思っていない。顔見知りのスタッフが、何げなく耳にして『それたいへんなんちゃうん』と支援につなげている」と言う。

## 親子の時間奪う

一般的に子どもが深夜、街をさまよう背景には貧困問題が横たわっていると有識者らは口をそろえる。

NPO法人「しんぐるまざあず・ふぉーらむ」の赤石千衣子理事長によると、経済的に苦しい母子家庭は手狭な家に住みがちだという。「母親と折り合いが悪くなっても、顔をつきあわせないといけない。母親が連れてきた交際相手と距離を取りたくとも、居場所がない。そうして家を出ることを選択してしまう」

千葉明德短大の山野良一教授（児童福祉）は「経済的な困窮が親子の時間を奪い、寂しさを募らせた子どもが深夜徘徊（はいかい）や家出に走ってしまう」と説明する。

「母子や父子家庭では、家計のために親は徹底して働くことを強いられる。特に母子家庭の場合、非正規労働が圧倒的。複数の仕事を抱えたり、実入りのよい早朝や深夜、土日の仕事に就いたりしている。代償になるのが親子の時間だ」

両親がいる家庭でも、父親が失業中の場合は注意が必要という。「一般論になるが、男性にとって仕事

はプライドにかかわる。さらに人のつながりの中心。それを失った状態だと、孤立感から虐待につながりやすく、子どもが家を飛び出す端緒になりかねない」

有効な手だてを考えるのは難しいが、山野教授は「親のしつけ論に終始してはいけない。問題はもっと根深いから」と説く。

「現実として家出してしまう子はいる。財源を考えると悩ましいが、逃げ込める場所は十分つくっておかないといけない。そうした場所を子どもたちにどう知ってもらうかも課題だ。ただ、親の養育力を上げない限り、根本的な解決にならない。働きながら子どもと向き合える時間を確保できるよう、児童扶養手当などを拡充させるべきだ」

名古屋にも保護・支援施設

中部地方では、虐待などを受けて家に帰ることができない子どもを保護・支援するNPO法人として「子どもセンターパオ」（名古屋市東区）がある。問い合わせはパオ＝052（931）4680＝へ。

## 名古屋・声掛け活動ルポ 繁華街さまよう無防備 少女ら「大阪遺棄、運悪いだけ」

大阪府寝屋川市の中学一年の少女が殺害・遺棄された事件。全容解明はこれからだが、犠牲になった子どもたちは夜間も二人だけで行動し、被害に遭った。夜の街、それも学校から解放される夏休みは子どもたちにとって多くの危険が潜む。繁華街で未成年者に声掛けのパトロールをするNPO法人「全国子ども福祉センター」（名古屋市中川区）に同行した。（社会部・加藤隆士）＝<1>面参照

二十二日午後七時、名古屋駅西口（同市中村区）。着ぐるみ姿のセンターのスタッフ十人ほどが、通り掛かる少女たちへ声を掛け始めた。着ぐるみは相手の警戒心を解き、覚えてもらうためだ。

午後八時ごろ、少女二人が西口を出て、繁華街に向かっていた。「JK（女子高生）ビジネス」の店や風俗店などが集まっているところだ。

二人は十七歳。髪の毛を染め、派手な化粧。とても未成年には見えない。「ご飯を食べて、それからカラオケ。お酒も飲んじゃうかも」

スタッフの愛知教育大三年、中畑杏梨さん（20）はネオンを指して「危ないお兄さんがいるから気を付けてね。困ったことがあったら、ここに」と呼び掛け、センターの連絡先が付いたポケットティッシュを手渡した。

「大丈夫」と二人。記者も大阪の事件について説明し、注意を促したが、「運が悪いだけ」と気にするそぶりはなかった。

午後九時。十六歳の少年四人に、センター理事長の荒井和樹さん（33）が声を掛けた。四人とも高校には通っていないという。荒井さんの問い掛けにも、ほとんど答えない。うっとうしそうに、足早に立ち

去った。荒井さんは「チヤホヤされる少女よりも、少年の方が孤独を感じている場合が多い。どうするつもりなのか心配」と気掛かりな様子だった。

午後九時半。十七歳の高校二年の少女二人に出会った。十時半発の夜行バスで、東京ディズニーランドに向かう予定という。中畑さんは「バスを待つ少女を狙ってナンパする男がいるよ。気を付けてね」と話した。

午後十時、この夜のパトロールは終了。開始から三時間、一帯では中学生ぐらいの子どもたちを含め、未成年者の姿が絶えることはなかった。中には、たばこを吸う少年らもいたが、スタッフ以外の大人たちは誰も関心を示さなかった。

児童養護施設の職員だった荒井さんは二〇一〇年から、夜の繁華街で声掛けを続けている。スマートフォンの無料通信アプリLINE（ライン）などの普及で、子どもたちを取り巻く環境は激変したと感じる。「家庭、学校、地域にネットが加わった。その中で今の子どもが一番大事にしているのがネット」と荒井さん。子どもたちはネットでつながった仲間たちと、居場所を求めて夜の街をさまよう。そこには危険が潜み、犯罪者が近づくすきが生まれる。

「ネットでつながる五百人に心配されるよりも、特別な誰か一人に心配される方がうれしいはず。そんな一人に、多くの大人がなってほしい」。荒井さんはそう訴える。

## 深夜徘徊 社会でなくせ

「夜回り先生」水谷修さん

花園大客員教授で、未成年者への声掛け活動を続ける「夜回り先生」として知られる水谷修さん（59）は、大阪府寝屋川市の死体遺棄事件について、「学校は夏休み前に深夜徘徊（はいかい）の危険性をどれだけ指導したのか。なぜ大人が声を掛けてやれなかったのか」と悔やむ。

警察庁の統計によると、二〇一四年に深夜徘徊で補導された全国の少年少女は四十二万九千九百人。この十年で、二十万人以上減ったが、補導全体に占める割合は五割から六割ほどへ増えている。

水谷さんによると、深夜徘徊中に犯罪に巻き込まれるケースは以前からあるが、最近「神待ちサイト」と呼ばれるインターネットの掲示板で探した男性宅に家出少女がただで泊まり、性犯罪の被害に遭う事例が目立っているという。

水谷さんは「深夜に子どもを見かけたらコンビニが一一〇番する態勢を整えるなど、社会全体で深夜徘徊をなくす努力をしなければ事件は防げない」と指摘する。

大阪府寝屋川市の市立中木田中一年の平田奈津美さん（13）の遺体が、隣接する高槻市の物流会社の駐車場で発見されて二十日で一週間。同じ中学の一年の星野凌斗君（12）も行方不明のままで、捜査関係者や家族らは焦りを募らせる。白昼の市街地で足取りが途絶えたのはなぜか。犯人が平田さんを執拗（しつよう）に刃物で傷つけた理由は。深まる謎を専門家と探った。（大阪報道部・相坂穰）

#### ▼白昼の怪

二人は十二日夜、京阪電鉄寝屋川市駅近くの商店街で「野宿」をした。平田さんは、携帯電話の無料通信アプリ「LINE（ライン）」で別の友人に「もう帰らない」などと家出を示唆し、十三日朝に「京都に行く」と書き込んだ。

午後三時ごろに駅前の駐輪場に星野君とみられる人物が自転車を止める様子が防犯カメラに写っており、そばに平田さんの自転車もあった。京都に向かおうとしたようにも見えるが、駅の改札やホームにその形跡は残っていなかった。足取りはそこで途絶えた。

大阪府警は、二人が駅周辺で何者かの車に乗せられた可能性があるとするが、目撃者は見つかっていない。元府警刑事の犯罪ジャーナリスト中島正純さん（46）は「二人は力づくでさらわれたのではなく、何らかの誘いを受け入れ、車に乗った後に犯人が豹変（ひょうへん）したのでは」と推測する。

#### ▼猟奇性も

平田さんの遺体が六キロ離れた駐車場で見つかったのは十三日午後十一時半。粘着テープで顔を何重にも巻かれ、窒息死したとされるが、左側の腕や足、腹を集中的に三十カ所以上も刃物で傷つけられていた。

防犯カメラに、午後十時半ごろから不審車両が写っていた。当初は二台の車が侵入し、複数の人物が関与しているかとみられたが、府警の映像解析で、一台だったことが判明。単独犯の可能性も出てきた。

犯罪心理学者で、こころぎふ臨床心理センター（岐阜市）代表の長谷川博一さん（56）は「あれほどの猟奇的な傷つけ方はグループではなく、特殊な性格の個人によるものと考えるのが自然。すぐに見つかるような場所に遺体を放置したのは、犯行を誇示したいという欲求を感じる」と言う。

顔見知りか行きずりの犯人かも現段階で絞り切れていないが、犯罪心理に詳しい心理カウンセラーの川村芳枝さん（49）は「二人は夜間に出歩くことが多かったとされ、そこで犯人に出会ったのかもしれない」と顔見知りによる犯行を指摘。「星野君が犯人の管理下で生存している可能性を前提に警察は慎重に捜査を進めるべきだ」と話した。

不審車 ワンボックスか

遺棄現場近く 国道通行の可能性

平田奈津美さんが殺害され、遺体が見つかった事件で、発見直前に付近の防犯カメラに捉えられた不審車が、現場と平田さんの無事が最後に確認された京阪電鉄寝屋川市駅を結ぶ国道170号を通った可能性があることが、捜査関係者への取材で分かった。

不審車は遺体発見場所のすぐ横に止まっていたことが既に判明。捜査本部は、別の場所で殺害された平

田さんを現場に運び込んだ疑いが強いとみて、国道沿いの防犯カメラを集中的に調べる。不審車はワンボックスタイプとの情報もあり、特定を急ぐ。平田さんは駅周辺で連れ去られたとみられる。

行動を共にしていた星野凌斗君は行方不明のまま、捜査本部は発見に全力を挙げている。

捜査関係者によると、駐車場から約二キロ南の国道沿いにあるガソリンスタンドから、遺体発見と同じ時間帯の防犯カメラ映像の提出を受けた。他にも映像の提供を受けて解析を進める。

平田さんは十三日午前五時十分ごろ、星野君と二人で歩く姿が、駅周辺の防犯カメラに写っていた。

遺体は同日午後十一時半ごろ、約六キロ北にある駐車場で、粘着テープで顔を覆われた状態で見つかった。近くの防犯カメラに写った不審な車は一台で、ライトの位置などからトラックではないとみられる。

危険性高まる夏休み 専門家は

「日頃から子どもに寄り添って」

被害者の平田奈津美さんと行方不明の星野凌斗君は、十二日夜から翌日にかけて二人で行動していたとされる。学校から解放される夏休みは子どもたちだけで行動し、事件に巻き込まれる危険性も高まる。

専門家は「大人が日頃から子どもに寄り添っておく必要がある」と注意を呼びかける。

目撃情報や防犯カメラの映像から、二人は深夜のコンビニや早朝の商店街にいたことが確認された。平田さんはスマートフォンのLINEを使い、友人らと連絡を取り合っていた。

**街で徘徊（はいかい）する子どもたちに声かけ活動をするNPO法人「全国こども福祉センター」（名古屋市中川区）の荒井和樹事務局長（33）は「学校に行かない夏休みは子どもたちがLINEで連絡を取り合い、大人が見えないところでつながりを求めている」と指摘。その上で「事件が起きてからでは遅い。普段から子ども一人に大人一人がちゃんと向き合い、日常的に関わるのが大事」と訴える。**

夏休みに子どもだけで遊んだ際に命を落としたケースもある。二〇一三年八月、三重県四日市市の中学三年の女子生徒＝当時（15）＝が友人と花火大会に出かけ、帰宅途中で殺害される事件が起きた。事件後、市教委は警察と連携しながら、街頭巡回活動などを強化、生徒らの深夜外出を控えるよう各学校などに注意事項を通知した。

日本福祉大の蔭山英順教授（臨床心理学）は「夏休みは解放感があるから、子どもだけで出かけたがる。自分の身は自分で守るという基本を、日ごろから徹底することが大事」と話している。